

『暗夜行路』のモザイク構造-時間と空間,類似と対照

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1267

『暗夜行路』のモザイク構造

——時間と空間、類似と対照——

宮 越 勉

はじめに

『暗夜行路』（初出は一九二一・一—一九三七・四「改造」に断続掲載。のち、一九三七・九および一〇、現在の構成となって改造社より刊行。）の作品構造はいかなるものか。『暗夜行路』は、いわゆる西洋風のロマンではない。日本的なものであることから、一見、絵巻物のような印象を与えている。が、もう少し奥行きがあつて、立体的ではあるまいか。それを証してみたい。

物語は主人公時任謙作に焦点が当てられ展開する。『暗夜行路』の作品構造を分析するにあたり、まずはそ

の〈時間〉の推移と〈空間〉の移動に着目したい。そこからこの長篇特有の構造を捉えてみたいのだ。その〈時間〉の推移に關していえば、時任謙作が夢想家であることに注意せねばならない。^①『暗夜行路』はしばしば小説世界の現在時から異世界（過去のことや現時異世界）に飛翔する。〈時間〉の流れを川の流れに譬えれば、ある時は淀みを作り停滞し、そして再びすみやかに流れ出すということは何度も何度も繰り返すのである。一方、その〈空間〉の移動に關していえば、時任謙作の転居や小旅行の一つ一つに注視する必要がある。その前篇が東京から尾道へ、その後篇が京都から大山へと移動し、いわば対称形を形成しているのは見易いことだが、総じて

『暗夜行路』の〈空間〉形成には、細心の伏線が張られていたり、主人公の〈空間〉移動のあり方にある種の法則性さえ見出すことができたりするのである。

『暗夜行路』には、作者志賀直哉のいわば無意識の美学が働いている。随所に散りばまれた夥しい数のワンカット、ワンシーン、そして様々なエピソードは、決して無造作に配置されているわけではない。具体的にどことどこが有機的な関連を持っているのか、それらをどれだけでも説得力をもって解説できるかが問題である。その際、ポイントとなるのは、〈類似〉と〈対照〉である。蓮實重彦が『暗夜行路』に偶数が氾濫していることを指摘したのは今やかなりの昔のこととなったが、この指摘は正しいもので、それをいかに応用するかにかかっている。⁽³⁾

〈時間〉の推移に従い〈類似〉の系列を形成するものもあれば、異なった〈空間〉に〈類似〉を発見できることもある。また、二つの事柄(二人の人物)の〈対照〉は『暗夜行路』の随所に見出される。そこから、謙作の人間観や人生観が捕捉でき、『暗夜行路』のテーマに迫ることさえできるのである。

以上のような観点から『暗夜行路』の作品構造の内実を追尋していきたい。

一

『暗夜行路』前篇における〈時間〉の推移と〈空間〉の移動からみていきたい。

「序詞」は前篇に所属している。『暗夜行路』本篇の謙作が成人した二十代半ばの青年であるのに対して、「序詞」は(主人公の追憶)とされ、〈時間〉のうえではむしろ過去のこととなる。が、「序詞」自体の構成は、謙作の母の死後「二月程」のちのこと、謙作が「六歳の時」を起点にしている。謙作少年の前に見知らぬ老人が現われ、その出会いのシーンから始まる。その「二三日」後再びその老人がやって来、父から祖父であると紹介され、さらに「十日程」して謙作は祖父の住む根岸に引き取られて行く。が、次に謙作と母との忘れられない「四つか五つ」の頃のエピソードが二つ(屋根事件と羊羹事件)嵌入されている。そして根岸での生活のあらましが叙述され、根岸の家に移って「半年余り」を経過した「或る日曜日か祭日」の日に父の本郷の家を祖父と訪問し、父との角力事件のエピソードが語られて「序詞」の世界は幕を閉じる。つまり「序詞」は時間的経過の順に話が進

展していないのだ。なぜ、このようなことになっているのか。それは、別稿で述べたように、謙作の祖父からの呪縛が眼目であり、祖父に始まり祖父に終わるという円環構造にあるからである。³⁾一方、〈空間〉の面でも、本郷に始まり、途中で二度根岸の生活を挟み、その間に本郷でのこと（屋根事件と羊羹事件）が挿入され、最後は本郷で終わるという形を取っている。謙作は本郷から根岸に移動しただけなのだが、「序詞」の世界の〈空間〉は、本郷↓根岸↓本郷↓根岸↓本郷と移動しているのである。これも円環構造となっているのだ。先に私は、『暗夜行路』の本篇を建物の母屋だとすれば、「序詞」は別棟であるとした。だが、「序詞」は本篇から孤立して存在するのではなく、そのいわば遠心力は前篇のみならず後篇にまで及んでいる。先に指摘したことも必要があれば再度触れることとしたい。

前篇第一の一は、謙作が「阪口の今度の小説」を読み終え、その読後の「興奮」からなかなか眠ることができず、階下に「気楽な読物」、この場合は「塚原卜伝」を取りに行き、それを読みながら眠りに就いたことから始まる。「塚原卜伝」の内容が示されているわけではないが、しばし謙作が「塚原卜伝」の異時空間に身を置いた

ことは確かである。『暗夜行路』ではこのように謙作が本の世界に入り込むことがしばしばある。ともあれ、劈頭、本の世界（異世界）への没入があった。

翌日、寝坊をした謙作は、竜岡と阪口の同時の訪問を受ける。二人を待たせている間、謙作は洗顔をするのだが、この間に「阪口の小説」のあらましと阪口に対する思惑などが挿入される。小説の現在時の流れから逸脱するものではないが、「阪口の小説」の世界、すなわち異世界が展開されたのである。前夜にこれが示されなかったのは、謙作が「腹立たしい中にも清々しい気持」^{うち}になっていて、阪口との関係に一応の決着をみていたからである。ところが予想外の阪口の訪問を受け、謙作は動揺したのだ。これから起こるであろう阪口との葛藤や対立を前に、謙作の洗顔の時間を利用して「阪口の小説」の世界がここで提示されたのはうまい演出法だと思ふ。

その後、謙作の初めての吉原行（引手茶屋西緑での遊び）が中心に描かれる（第一の二）が、謙作は今、「精神的にいい状態に居ない」のだとされる（第一の三）。が、突如、ロマンチックな常燈明の愛の蠟燭のエピソードが展開される。それは石本と別れた帰途の道すがらに起こったのだが、謙作が夢想家であることをよく表して

いる。想像世界での自分と石本との会話や「母方の祖父
母」の追懐もあって、現時点とは陸続きだが、別趣の世
界を形成している。現時異世界の展開としていい。

第一の五は、回想部分を中心に行っている。愛子への求
婚失敗の顛末である。正確にこの事件が今から何年前の
ものかは書かれていない。阿川弘之は、『暗夜行路』本
篇の開始時を、謙作数えの二十六歳、大正元年九月と定
め、この愛子事件をそれより三年前の明治四十二年のこ
ととしている。二、三年前のこととみるのが妥当なところ
だろう。ただ、阿川は、時任謙作の年譜の明治四十五
年（大正元年）の項に、「父の戸籍を離れ、赤坂福吉町
に住む。」としているが、愛子求婚の折、父は謙作に
「然しお前も今は分家して、戸主になつて居るのだから、
……」と言っていることから、謙作が根岸を離れ、お栄
と赤坂福吉町に住まうようになったのは、明治四十二年
頃とみた方がいように思う。それはともあれ、第一の
五は、登喜子に対するイリュージョンが冷めかけた折に
配置されている。登喜子へのイリュージョンが持続され
ていれば、昔のことなど回想するに及ばないのだ。以上
のように、第一の五の大半は、愛子事件の回想という過
去のことが嵌入されている。そして第一の六は、亡くなっ

た旧い友の命日に仲間たちと染井に墓参することから始
まる。『暗夜行路』の現在の（時間）の流れは一旦中断
されたが、再びなだらかに流れ始めるのである。

第一の六は、友人緒方とのつき合いが中心となってい
るが、その結末部で、「十年程前の秋、一人旅で日本海
を船で通つた時、もう薄く雪の降りてゐる剣山の後ろか
ら非常に美しい曙光の昇るのを見た」ことが思い出され
ている。前篇第一では謙作の自然との関わりは極めて少
ないのだが、現時の「雨後の美しい曙光」とは別に、
剣山の曙光のことは過去回想部としてあることを銘記し
ておきたい。

そのあと、緒方、宮本らとのつき合いのなか、謙作の
銀座清賓亭の女給お加代に向ける関心が中心に描かれる
（第一の七、八）が、突如、第一の九では謙作の「長い
間怠つてゐた日記」の世界が展開される。ここも夢想家
謙作の性格がよく表れたところで、人類の永生、発達の
思い、飛行機を肯定し、天才でなければ出来ない文学の
「仕事」を目指すというのである。いわば「ヒコキ空
想」というもので、謙作は「兀奮」し（第一の十）、夢
想のひとつを過ぎたのである。現時異世界のことと
してよい。なお、この日記のなかで、マースという飛行

士が日本で初めて飛行機を飛ばした日（明治四十四年四月一日から四日間）のことが回想されている。謙作はその場に居合わせ、目撃し、「不思議な感動」を覚えたというのだ。『暗夜行路』の現在時から一年半ほど前の過去の回想である。

第一の十では、お加代へのディスプレイションが示されるが、それは謙作の「想像」世界からもたらされたものであった。謙作は、銭湯の湯槽の中で両手に留桶を抱え大きな体で不恰好な姿で泳ぐお加代のことを「想像」し、幻滅を覚える。現時異世界が映像のように展開されたとはいいい。

第一の十一では、謙作の「深川のさう云ふ場所」（洲崎遊廓）での放蕩を語ることから始まる。こうして謙作は、祖父の妾だったお栄を妾に意識し出し、お栄から誘惑を受ける「想像」や「空想」の現時異世界にしばしば入り込んでいく。その具体的なシーンはここでは省略するが、総じて前篇第一の世界では、現時異世界の叙述が多く見られるのが特徴となっている。

さらに第一の十一では、謙作の見た「夢」の世界が開かれている。阪口が旅先で「播摩」をして死んでしまったこと、および「淫蕩な精神の本体」を知るという内容

のものである。むろん「夢」の世界は、現実世界と通底しているが、現時異世界の展開としていい。こうして謙作は、お栄から逃れるべく、また文学の「仕事」に傾注すべく、場所変えを思い立ち、尾道行を決意するのである。

謙作にとっての「初めての土地」、尾道は、その景観にしる人間にしる「いい感じ」を与えてくれた（第二の二）。そういう尾道到着直後に謙作は、千光寺に登る石段の中頃の或る「掛茶屋」で、茶店の主から「玉の浦」の伝説を聴く。伝説の世界も明らかに異世界のことである。本の世界と同じように捉えてよい。昔、この辺りは、山の上の「光る珠」のおかげで夜も灯りがいらぬほどだったが、或る外国人に安易に売り持っていかれてからは、他の土地同様、夜は提灯が必要になったという「祖先が間抜だった伝説」だとされる。この時は、謙作はこの伝説をほほえましいものとして受け入れる。が、この伝説は『暗夜行路』の展開のなかでどのような意味合いを持つのだろうか。深読みかもしれないが、尾道での今後の謙作のことが予見されたみたい。「光る珠」がすでないように、謙作の文学の「天才」もあるようでないものであり、その仕事は挫折する。さらに、この土地で自身の暗い出生の秘密がもたらされる。まさしく謙作に暗

夜が訪れるということを暗示してまいか。後篇にも伝説の記述があり、読み過ぎせないものがあるのだ。

第二の三には、謙作の「幼時から現在までの自伝的なもの」の内容の一部が示されている。茗荷谷に住んでいた頃の思い出、本郷竜岡町に移ってからの思い出の数々が断片的に回想され叙述されている。『暗夜行路』の〈時間〉は過去に遡及するのだ。なお、「序詞」は、この自伝的長篇が挫折し、その残された膨大な草稿のなかから、とりわけ幼時期の印象深いものを作者謙作が短篇仕立てにしたものと捉えてよいだろう。

第二の四には、いわゆる象頭山の空想が展開されている。巨象に変身した謙作が人類との戦争に及ぶのだ。夢想家謙作による、現時異世界の現出である。

屋島への小旅行は謙作に深い孤独感をもたらし、お栄との結婚を思い立たせる(第二の五)。そして尾道に帰り、お栄求婚の思いが変化しなかったことから、これを兄信行に託すことにする。第二の六には、その信行からの返事の手紙が示される。ここで謙作の出生の秘密が明かされるのだが、ひととき〈時間〉は謙作の出生時に遡及する。祖父母は秘密で墮胎しようとしたが、芝の祖父(母方の祖父)がそれに反対した。謙作は墮胎を免れた

子でもあったのだ。ともあれ、謙作出生時にまつわる過去の時間帯のことが挿入されているのである。

謙作は、中耳炎を患い、帰京する。帰京するとすぐに「耳鼻咽喉専門のT病院」で手術をしてもらい、手早く済んだが(第二の十)、ここでこの病院に勤める「見かけによらず所謂不良性のある」看護婦のことが思い出されている。昨年、秋、「或る青年」をそのかして妹咲子にラブレターを書かせたという看護婦である。むろんここでは直接この看護婦は出て来ない。が、この時点から二年遡る、すなわち明治四十四年に、咲子はこの病院に入院したことがあった。その折、謙作はこの看護婦を見知っていたのである。なお、その頃、謙作が大学時代の仲間が始めた「或る同人雑誌」に短い小説を二、三度出したことも判明する。愛子事件よりはあとのことだろう。ともあれ、ここは過去の回想部分の嵌入である。

第二の十一では、娘義太夫の栄花のことが回想されている。謙作が中学を卒業する頃から高等科にかけて女義太夫ファンになっていたことがつかめるが、とりわけ栄花に関心を寄せていたのである。過去回想部なのだが、今は桃奴という芸者になっている栄花の人生も語られていて、第二の十三の前半までは、栄花の章と呼んでもさ

しつかえのないものになっている。

第二の十二で、謙作は信行と一緒に五反田から大森方面に貸家捜しに出かける。その折、植木屋の亀吉に関することが話題に上る。謙作はこの亀吉を本郷の家で見かけたことがあった。余りに見かけが好人物すぎることから、裏があるように感じた。その印象はその「日記」に書きつけておいたほどである。これは、『暗夜行路』本篇開始時よりは以前の時間帯のこととみられ、近接過去の嵌入としていい。だが、この現在時から「二三ヶ月後の話」として、亀吉が「本統の正直者」ではない、狡猾な男であったことを括弧に括って説明している。亀吉のエピソードは、現在時をまたいで過去のことと先のこととがひとまとまりとなって叙述されているというのが正確なところである。

同じく第二の十二で、「先年京都で、嫂のお政といふ女を見た事がある、」ということが示される。これも過去の回想部分といえる。「先年」とはどれほど前のことかはっきりしないが、そんな古い話ではあるまい。謙作は、お政の「気六ヶしさうな、非常に憂鬱な顔」を一瞥し、その心には張りがなく、その懺悔之居には偽善が伴っているはずだとするのである。

亀吉のエピソードと嫂のお政のことは、謙作の人間観察力の鋭さを示すものとして〈類似〉している。また、女の罪（むろん母の不義から連動する）ということ、嫂のお政のことは、「斃れて後やむ」というイメージの栄花のことに〈対照〉をなしている。亀吉のエピソードと嫂のお政のことは、配置のうえからいっても、栄花の章に組み込まれて至当なものだったといえる。これは、のちに述べるつもりであったが、あまりに捉え易いことなので、敢えてここで記しておくことにした。

大森移住後の謙作は放蕩の深みに陥っていく。ただ、前篇第二における謙作の〈空間〉移動は、大雑把に言って、東京（赤坂）↓尾道↓東京（赤坂）↓大森になっていることを銘記しておきたい。

第二の十三で、謙作は、心身ともに不調をきたし、心の貧しさを感じる。そのような折、信行から聞かされる数々の「禪の話」は救いとなった。「徳山托鉢といふ話」を聞いた時は泣き出してしまったという。こういう「禪の話」の一つ一つも異世界のこととしてよい。現実とは異なる世界に没入できるからこそ感動もできるのだ。ただし、謙作の禪に対する姿勢は、信行とは違い、師につくことをいやがるものであったことに注意したい。

第二の十三の後半部で謙作は、電車の中で西鶴の「本朝二十不孝」を懐から出して読んでいた。この時は、「仕舞ひの一節」から読み出しているが、それ以前に「最初の二つ」を読んで「悉く感服して居た」とされる。近接過去に属する読書の感想が中心に語られているが、本の世界という異世界の展開をここに見出せるのである。

第二の十四では、その深い疎外意識から謙作は、「根こそぎ、現在の四囲から脱け出る」という変身願望を語る。それは想像の翼に乗って、「何処か大きな山の麓の百姓」、それも「仲間はずれ」の男になっていて、そして罪深い醜い女を妻としてひっそりその一生を終えることを夢想する。これは現時異世界の展開としていい。

第二の十四のしまいの方で、謙作は、お目当てのプロステイチユートを待つ間、つい先刻買ったばかりの「李白の小さい詩集」を読み始める。雑念を払うためだ。李白の伝記から酒にまつわる感想を抱いたり、「莊周夢蝴蝶。蝴蝶為莊周」という句に何となく心を惹かれたことが書かれている。しばし謙作は、曲がりなりにも本の世界の現時異世界に身を置いたとしていいだろう。

総じて、前篇第二に流れる現在の〈時間〉の流れを中絶するものとして、夢想家謙作による現時異世界の展開

もそれなりに見られるが、過去の回想部の挿入が多いのが特徴となっている。謙作は尾道で「自分の幼時から現在までの自伝的なもの」の執筆に挫折した。が、『暗夜行路』の所々に嵌入された過去のことを並べ変え、順序立てると、謙作の自伝がかなりの程度まで形成できるとに気づくのである。阿川弘之が時任謙作の年譜作成という実作者らしい試みをなし得たのも、『暗夜行路』の特殊な〈時間〉構成を見逃していなかったからだと思う。

二

高橋英夫は、『暗夜行路』の「後篇」は「さまざまのシチュエーションにおいて前篇のくりかえし、変形、再現であった。」としている。³⁾この見解におおむね賛同するが、それを念頭に置きながら、『暗夜行路』後篇における〈時間〉の推移のあり方と〈空間〉の移動のあり様をみていきたい。

後篇第三の一は、謙作が「不図した気まぐれで、一ト月程前から」やって来ている京都にその舞台を移している。その〈空間〉の起点は京都なのだ。

そして「古い土地、古い寺、古い美術、それらに接する事が、知らず彼を其時代まで連れて行つて呉れた。」と叙述されている。謙作は、いわばタイムスリップをしていて、異世界にその身をゆだねているのだ。二尊院の「法然上人足びきの像」（第三の一）や博物館の「如拙の瓢箪鮎魚図」（第三の二）などの具体的な古美術品の鑑賞がなされている。古美術品鑑賞は、読書の世界と同様に、現時異世界を現出させるのである。

東三本木の宿に泊まっている謙作は、夕涼みがてら河原に散歩に出かけ、そこで「若い美しい女の人」（直子）を見初める（第三の一）。一目惚れとしてよい。そして、「あの気高い騎士ドンキホーテの恋」を思い描く。実は大森に住んでいた折、謙作は、「ドンキホーテ」を読んでいたが、その時はさして迫ってくるものがなかったという。だが、いま意味あるものとして甦ってきたというのだ。これも現時異世界のものが入り込んだところだとしてよい。恋愛のあり方として、その対象を崇高なものとし、またおのれを気高いものとする、そういう形のものを考えているのである。

とはいえ、実際問題として、その人と接触の機会を得られそうにない。そういう時、謙作は、「彼の或る古い

友達」が、好きな女性の家の前で故意に自転車を動かさない程度にこわし、その家に預かってもらい、次第に接触の機会を作つて行つた話を思い出す（第三の一）。この小さなエピソードは過去のものに属する。

同じように、「昔」のこととして、「或るむさくるしいなりをした大学生」が上野公園で通りかかった美しいお嬢さんを見初め、あとを追いかけて、その家に入って主人に面会を求め、結婚を申し込んでうまく話をまとめてしまったというエピソードが嵌入されている（第三の二）。超スピード結婚の例である。「国語の教師」から聴いた話だというのだから、謙作が学生時代のことだ。

この二つのエピソードは〈類似〉している。そしてドンキホーテ的な恋愛とは〈対照〉をなす。謙作はドンキホーテ的な恋愛に邁進していくのだが、謙作の人間性を明瞭にするうえで、この二つの過去の時間帯に属する他人のエピソードの挿入は巧妙なものだったといえる。

第三の三で、謙作は友人の画家高井と新京極で活動写真を見る。「真夏の夜の夢」を現代化した独逸ものの映画である。これを謙作は面白く思ったというのだから、この時、現時異世界にその身を置いたのである。

この関連でいえば、お栄と一つ部屋に寝ることになつ

て、気まぐさからなかなか寝つかれない折、謙作は、古本屋から買って来た「から騒ぎ」を読み始めるのであった（第三の九）。謙作は、喜劇「から騒ぎ」の異世界に身を置き、「軽い自由な気分」になり、やがて眠りに沈んで行ったのである。

古美術の鑑賞、喜劇類に接することで、謙作は実現化しつつある直子との結婚において、直子のイリュージョンを大きくふくらませてしまっていた。「鳥毛立屏風の美人のやうに古雅な、そして優美な、それでなければ氣持のいい喜劇に出て来る品のいい快活な娘」というふうな、直子を作り上げ、それに恋していたことに気づくのである（第三の十二）。まさしく夢想家の恋であり、ドンキホーテ的な恋を持続させていたのである。

総じて、第三の前半部における〈時間〉の流れは、謙作と直子の結婚に向けて進むので、淀みがほとんど感じられない。しいて挙げるならば、第三の七で、謙作がいったん大森に帰っている折に見る「夢」の世界の展開がそれに当たると思われる。

この「夢」は二段構えとなっている。その前段は、謙作が最近南洋から帰ったTを訪ねると、「雨中体操場」のような大きな建物があり、その中に檻のようなものが

たくさんあって、その一つに「何十疋といふ栗鼠くらの小さな狒々が、目白押しに泊り木にとまつてゐる」のを、謙作が面白く思ったことである。加賀乙彦をして、

「何を意味するのか私には不明だ。」と言わしめた箇所である。⁽⁶⁾ おそらくこれは、前篇第二の十三で謙作が女中の由を博覧会見物（南洋館というので土人の踊りがある）

に連れて行けなかったことと連動している。今、謙作は、いったん大森に帰って来ている。心残りのことは形を変えて「夢」に現われやすい。「雨中体操場」のような大きな建物とは博覧会関連の建物で、「何十疋といふ栗鼠くらの小さな狒々」とは南洋に関連するものと思われる。後段は、謙作がTと別れ、反逆人となっていて刑事たちに追われ、上野の博物館の門の辺りに逃れて来ていることから始まる。通りかかった兵隊の一人とその着衣を交換するが、軍服の着方がまずく、見破られ、捕えられてしまったというのである。なるほど反逆人とは唐突のようだが、謙作がアウトサイダー的な存在に関心が強いということも納得いくものがある。水戸天狗党の末路の話（第三の八）や不逞鮮人の関徳元の話（第四の二）に関心を寄せていること、また、山の麓の村八分の百姓の身に变身することを想像したり（第二の十四）、人類

全体を相手に戦う巨象に変身している空想をなしたこと（第二の四）などは、アウトサイダー的存在への関心と
いうことで〈類似〉するのである。ただ、軍服に関し、
謙作の徴兵体験などが『暗夜行路』のどこにも書かれて
いないのが惜しまれる。とはいえ、この部分の解釈とし
ては、謙作はまだ不義の子という出自を気にかけていて、
直子との縁談がそのために土壇場でダメになるのではな
いかという不安が「夢」に現われたとすることができ
るのである。私自身の勝手な解釈を長々と試みてみたが、
この「夢」も現実と陸続きであり、『暗夜行路』を流れ
る〈時間〉の、いわば同じ川の流れに出来た小さな淀み
に過ぎなかったとしたい。

そして、石本の所に届いているS氏からの手紙のなか
の、N老人が謙作の出生について「差支へなきもの」と
したことに謙作は感動を覚えるのであった。だが、謙作
は「十中七分通りもう大丈夫だ」とし、まだ慎重だ。

第三の八は、京都に戻って、N老人夫婦との会見に臨
む。「余りに社交馴れない」という謙作は、この会見が
うまく運ぶかどうか不安があった。「普通の世間話」
に終始したのがかえって気持ちよかったのだが、そのな
かでN老人が語った武田耕雲斎一味が敦賀で捕えられ倉

に閉じ込められて「しつ」にかかった話は印象深いもの
がある。謙作は、「暗い、じめ／＼した塩魚の倉で、全
身しつに悩まされ、寒さに向つて一人々々仲間が死んで
行く」そういうシーンを想像し、「一寸かなはない気」
がしたのである。これも現時異世界の点描としてよい。

そのあと謙作は、奈良から伊勢へ、そして母の故郷の
亀山に旅をし（第三の八）、やがて南禅寺北の坊の寓居
に住むこととなる（第三の十）。『暗夜行路』の〈時間〉
では大正二年の秋となっている。そのあと上京して妹達
（咲子と妙子）との心温まる交流があったり（第三の十
一）、直子との見合い（第三の十二）、そして結婚の簡単
な式が挙げられ（第三の十三）、衣笠村に移転して二人
の新婚生活は本格的に開始されるのである（第三の十四）。
後篇第三の謙作は、あちこち移動しているが、その生活
〈空間〉の本拠はすでに京都にあるのだ。

第三の十六は、〈時間〉の流れが速くなる。さりげな
く四月から五月にかけての京都の年中行事が列挙された
りして〈時間〉はなだらかに流れていく。身重の直子を
気づかい伯母がやって来るが、謙作はこの伯母に親しみ
を感じ、八月の暑さを避け、三人で「何所か涼しい山の
温泉宿に二三週間」逗留することを「想像」する。これ

までそういうアットホームなことを経験していない謙作にとって「胸の踊る程」の楽しい「想像」だったのである。この思いつきのような短い「想像」も現時異世界の展開としていい。もっとも、身重の直子を気づかう伯母の反対にあって実現はしなかった。ともあれ、この第三の十六は、他の章とは異質で、〈時間〉という川の流れていえば、急速な流れとなっているのである。

第三の十九には、「赤児の誕生の日の夜」、謙作が末松らと「シューバートのエールケーニヒ」を聴きに演奏会に出かけたことが回想されている。小説の〈時間〉は近接の過去に遡及しているのだ。その曲は、嵐の夜に子供を死神に取られるという内容のもので、縁起の悪いものだった。謙作は、「厄落し」のつもりで、その帰り道でプログラムを何気なく落としてきたという。

翻って、第三の十七は、十月の下旬のある日、謙作が末松、水谷、久世などと鞍馬の火祭りを見物しに出かけたことを語っていた。朝早く帰宅すると、女中の仙が、お産があったことを告げている。本来なら、「赤児の誕生の日の夜」というのだから、「エールケーニヒ」の演奏会に行ったのは、第三の十八に配置されねばならなかった。しかし、「エールケーニヒ」のエピソードは、第三

の十九に置いた方が据りがよいのだ。直子の母などは鬼門の柳だといって台所口の柳を植え替えさせたがった。謙作の周りの人たちも赤子の病気を本気で気にかけて必死な思いでいるのである。「エールケーニヒ」の件がここに挿入されたことで、赤子の危機、その運命が抜き差しならないものとして重くのしかかってくるのだ。長男直謙の死、こうして大正三年は暮れていく。

後篇第四の一の謙作は、初児を失っているので、この年、大正四年の春を「前年とは全まごで異ちがつた心持」で過ごしていた。やがて、お栄が大陸での失敗から内地に帰りがっていることを知り、謙作は、お栄を迎えに京城まで出かけていく。『暗夜行路』に〈空間〉の移動が起こり（第四の二）、お栄の大陸でのことが叙述される。お栄の天津から大連、そして京城でのことは、過去に属するものであって、それが嵌入されている。さらに、不逞鮮人の閔徳元のエピソードが挿入される。これは、高麗焼の研究者から聞いた話となっているのだが、ここにも現在の時間帯とは異なる異世界が展開されるのだ。

お栄を連れて京都に帰って来た謙作は、その留守中に直子と要の間に過失（不義）が起こったことを嗅ぎ当てる。そして、直子が幼い頃、要と「亀と鼈」という卑猥

な遊びをしたことが叙述される(第四の五)。『暗夜行路』に描写のあり方の異なるものが入り込んでいるのだが、過去の世界(謙作の預かり知らない世界)の嵌入でもある。直子はこの遊びがトラウマとなって要との間に過失(不義)を犯してしまったのだ。

直子を理性の上では赦せても感情の上でどうしても赦せない謙作は、しばしば癡癡を起こしたりする。が、謙作は、「久しく遠退いてゐた、古社寺、古美術行脚」を思い立ち、高野山、室生寺などに小旅行に出かけたりする。翌年、すなわち大正五年の一月には法隆寺への旅から帰ると赤子(隆子)の誕生があった。以上のようなことは第四の八に叙述されている。第四の八も『暗夜行路』の(時間)の流れ方でいえば、急流となっている。その後、いわゆる京都七条駅の事件(第四の九)を経て、やがて謙作は、いわば自己改造を目指し伯耆大山に向け旅立つ(第四の十一)。大正五年の夏のことである。ここに大きな(空間)移動がなされた。後篇の京都↓大山という図式が、前篇の東京↓尾道に対応し、(対照)かつ(対称)を形成していることはいうまでもない。

謙作は、大山までの途次、城崎と鳥取に泊まる。鳥取の宿では、宿の女中から「多鯨ヶ池の伝説」と「湖山長

者の伝説」を聞かされた(第四の十二)。前篇の尾道における玉の浦の「伝説」と(対照)をなしていよう。むろん、現時異世界の展開である。「多鯨ヶ池の伝説」とはこの池の主である大蛇になっているお種という娘の妄執のようなものを主眼にしている。「湖山長者の伝説」はいわば天罰を受けた話である。詳しいことは伝説研究から見えてくるかもしれないが、女の妄執といふ罰を受けた話といひ、女の罪のテーマがまだ持続していることを思わせる。

第四の十三は、大山の蓮浄院に向かう途次の、分けの茶屋周辺を舞台としている。謙作は、「五十余り」の「車夫」から、昔、海老攻めの拷問にかけられた老盜賊の話聞かされる。それは過去のことだが、謙作にとつて現時異世界の展開として現前する。そしてこの「昔の爺おやぢ」は、いま謙作の眼の前にいる「分けの茶屋」の、老樹のような、あるいは苔むした岩のような「八十近い白髪の老人」と見事な(対照)を形成する。謙作は、この(対照)から、この枯れたような老人が醸し出している「静寂な感じ」に羨望の念を抱くのであった。この場面は、前篇第二の二における、千光寺に登る石段の中頃にある「掛茶屋」でのシーンと(類似)している。尾道

生活のとは口でその後の謙作のことが暗示されたように、この「分けの茶屋」のシーンは、謙作の大山生活のとは口にあり、謙作のその後のことが暗示されているとみることができるのである。

第四の十四で謙作は、鳥取で買った「帝国文庫の高僧伝」(第四の十二)のなかの恵心僧都が空也上人を訪ねての問答を読み、涙まで流している。また、第四の十六で謙作は、同じ「帝国文庫の高僧伝」のなかの元三大師の伝をじっくりと読み始めている。これらも読書の世界であり、現時異世界が開けていると正しい。

第四の十五には、お由が「生神様」になっている「夢」が描かれる。この「夢」は、根深い性欲の蠢きを現わしている、謙作は現在の心境との違和感を感じるが、ともあれ「夢」という異世界が開かれているのである。

お由を通して、竹さんとその女房の「血塗騒」のことが謙作の耳に入ってくる(第四の十五、十七)。曲がりなりにも謙作は小説家である。その豊かな想像力をもってすれば、竹さんのことを題材に一篇の作品が出来るほどのものがある。竹さん夫婦に関わることも現時異世界のこととしていいだろう。

第四の二十(最終章)で謙作は、半睡半醒の「夢」を

見る。これもむろん異世界のこととしていい。この「夢」についての私見はすでに述べているので省略するが、この「夢」のあと謙作が浄化されたことを認識しているのをポイントとしておきたい。

総じて、『暗夜行路』後篇の(時間)はなだらかに流れていき、謙作自身の過去よりも他者の過去が挿入されることが多いのが特徴といえるだろう。が、次の頁の一覧表を参照すれば明瞭だが、現時異世界の展開の嵌入などは、その数のうえで前篇のそれとほぼ拮抗しているのである。

三

『暗夜行路』における飛行機の肯定から否定の推移をみたのは平野謙であった。このことを私流に捉え直してみたい。第一の一で謙作は、友人の竜岡と阪口の同時の訪問を受ける。この竜岡と阪口は外見上からも(対照)をなしている。「竜岡は小柄な阪口に較べては倍もあるやうな大男で、その上柔道が三段であった。」とされているのだ。が、竜岡は、飛行機の発動機の研究で近くフランスに行くことになっている。竜岡の存在が以後、飛

<p>前篇</p> <p>(序詞) 本郷、根岸</p>	<p>第一</p> <p>● 大正元年秋 東京・赤坂福吉町</p> <p>▽塚原卜伝 (一)</p> <p>□阪口の小説 (一)</p> <p>○常燈明の愛の蠟燭の エピソード (三)</p> <p>●愛子事件 (五)</p> <p>● 剣山の曙光 (六)</p> <p>○謙作の日記 (九)</p> <p>● マースの飛行演習 ○お加代へのディス イルージョン (十)</p> <p>● お米誘惑の想像 (十一)</p> <p>○お米誘惑の空想 (十二)</p> <p>◎ 播摩の夢 (十二)</p>	<p>第二</p> <p>尾道・大正元年暮れ</p> <p>▽玉の浦の伝説 (二)</p> <p>● 「自伝的なもの」の執筆 (茗荷谷、本郷) (三)</p> <p>○象頭山の空想 (四)</p> <p>(屋島) (金刀比羅)</p> <p>● 信行からの返事の手紙 (茗荷谷、本郷) (六)</p> <p>赤坂福吉町 (十)</p> <p>● 不良性のある看護婦 ● 栄花のこと (十一)</p> <p>● 植木屋亀吉 (十二)</p> <p>● 嫂のお政 (十二)</p> <p>大森 ▽禅の話 (十三)</p> <p>▽本朝二十不孝</p> <p>○変身願望の想像 (十四)</p> <p>▽李白の詩集</p>	<p>第三</p> <p>● 大正二年夏 京都・東三本木の宿</p> <p>▽古寺、古美術 (一)</p> <p>▽ドンキホーテ</p> <p>● 或る古い友達のこと</p> <p>● 超スピード結婚 (二)</p> <p>● 真夏の夜の夢 (三)</p> <p>▽大森 (六・七)</p> <p>◎ 反逆人になっている夢 ● 「し、つ」の話 (八)</p> <p>(伊勢) (龜山) (八)</p> <p>▽から騒ぎ (九)</p> <p>京都・南禅寺北の坊 (十)</p> <p>● 大正三年 京都・衣笠村 (十四)</p> <p>○家族旅行の想像 (十六)</p> <p>● エールケーニヒ (十九)</p>	<p>第四</p> <p>● 大正四年春 (朝鮮)</p> <p>● お米の大陸でのこと (二)</p> <p>● 閔徳元の話</p> <p>● 龜と鼈の話 (五)</p> <p>● 大正五年夏 (城崎) (鳥取)</p> <p>▽多鯨ヶ池伝説 (十二)</p> <p>▽湖山長者伝説 (十二)</p> <p>● 海老攻めの拷問にあう 老盜賊の話 (十三)</p> <p>大山 ▽帝國文庫の高僧伝 (十四、十六)</p> <p>◎ お由、生神様の夢 (十五)</p> <p>□ 竹さん夫婦 (十五、十七)</p> <p>◎ 分離した足の夢 (二十)</p>
-----------------------------	---	--	---	--

飛行機に関する〈類似〉系列の起点となる。謙作はむしろこの竜岡に好意的であり、謙作自身もかつてマースの飛行演習を目撃して「感動」を覚えることがあり、飛行機肯定、すなわち科学の進歩を願ってやまないものである（第一の九）。ところが、『暗夜行路』後篇になると、飛行機肯定の考えにゆらぎが生じているのが読み取れる。謙作が京都に来た頃、飛行士の「荻野はん」の人氣は大変なものであったが、東京までの無着陸飛行に失敗、墜死し、その遺物は展覧されていた（第三の十）。このニュースを謙作はバリに在る竜岡に宛てた手紙にも書いていた。

このエピソードは、謙作の京都での東洋古美術への接近ののちに配置されたもので、西洋文明の象徴である飛行機の肯定思想に翳りが生じているとみることができのた。次に、飛行機は第四の六から七にかけて現われる。謙作が妻直子の過失（不義）を知り、末松と会っている折、実際に飛行機の墜落を目撃するのである。謙作は直子のことで暗い思いに覆われている。そこに飛行機の墜落の目撃である。飛行機の肯定思想は、大きく旋回し否定される寸前のところまで来たとしていいだろう。そして、大山における謙作は、空を悠々と舞う鳶の姿を仰ぎ、飛行機の醜さを思う（第四の十四）。ここで鳶と飛行機

は〈対照〉をなしているのだが、この飛行機否定の思想は飛行機肯定の思想（第一の九）とも見事な〈対照〉を形成するのである。自然の意志に逆らう無制限な人間の欲望の否定に逢着するのだ。それを『暗夜行路』は、〈類似〉の連鎖と〈対照〉の重層的な描出によって定着させているのである。

『暗夜行路』における謙作の対自然関連は、すでに須藤松雄が指摘しているように、大雑把に言って、前篇の「対立的自然関連」から後篇の「調和的自然関連」の推移とみていい。むしろこれは〈対照〉も形成する。謙作は尾道に向かう夜の船上の甲板で、「総ての人々を代表」しているような「誇張された気分」でいながら、「何か大きなくものの中に自身が吸ひ込まれて行く感じ」（不安感が伴う）に捕われた（第二の一）。しかるに、夜明け前の大山の中腹での謙作は、「大きな自然の中に溶込んで行く」「不思議な陶醉感」を味わった（第四の十九）。一方は海、もう一方は山、大自然に対する抵抗感の有無で〈対照〉をなしている。また、吉原行の朝帰りの帰途、謙作は「雨後の美しい曙光」を見、併せて「十年程前」の剣山の「非常に美しい曙光」を思い出したのだが、これは時間的にも非常に短い自然への共感に過ぎ

なかった(第一の六)。しかるに、第四の十九では、「橙色の曙光」が昇るのを見、大山の影を平地に眺めるといふ稀有の体験から「感動」を受けたのである。この三つの「曙光」は、〈類似〉系列にあるが、謙作に与えた「感動」の深淺という点で、〈対照〉も形成するものだったのである。『暗夜行路』には、夥しい数の自然(景色や動植物)が出てくる。その自然関連については、稿を改めて私なりの考察にチャレンジしたいと思っている。

謙作には二人の祖父が存在し、これが〈対照〉をなしている。父方の祖父(実は実の父)は、下品であり、放蕩の雰囲気を漂わせ、幼い時分から謙作の嫌悪の対象であり、また謙作を呪縛していた。母方の祖父(芝のお祖父様)は、謙作の尊敬の対象とされ、またその夫婦関係は理想的なものとされていた。『暗夜行路』は、謙作が父方の祖父から受けたものといかに闘い、その呪縛から解放され、どれくらい母方の祖父に近づけるかという物語だともいえるのだ。そのうち父方の祖父に関するものは、幾つかの〈類似〉の系列を形成する。根岸の生活(「序詞」)で示された「花合戦」は、謙作と直子の新婚生活に「花合はせ」として突如持ち込まれ(第二の十四)、やがて直子と要の間に過失(不義)が起る契機となっ

た(第四の三、五)のである。また、父方の祖父の再来として、前篇における阪口、後篇の水谷と要に見出すことができる。謙作は墮胎を免れた子であった。父方の祖父は、謙作の母の妊娠を知ると秘かに墮胎することを主張したが、母方の祖父(芝のお祖父様)の反対にあり、それは実現しなかった。青年謙作は、阪口の書いた墮胎の小説に憤りを感じた。さらに阪口は、「夢」のなかのこととはいえ、「播摩」まで墮ちていくほどの放蕩者であった。阪口が父方の祖父の再来といえる所以である。

後篇の水谷は、謙作の嫌悪の対象であり、デモニーッシュ的な存在ということで、これも父方の祖父の再来といえる。要は、謙作の惹かれる上品なN老人の息子なのだが、N老人とは皮肉なことに〈対照〉をなして、「播摩」と〈類似〉する性の深淵に関わる卑猥な遊戯「亀と鼈」の当事者であった。謙作の母と関係を持った父方の祖父、直子と関係を持った従兄の要、要が父方の祖父の再来であることは自明なのだが、『暗夜行路』の他のエピソードや人物と〈類似〉や〈対照〉を形成していることに気づかねばならないのである。

お栄は祖父の妾だった女性である。どうしてもそこには不穏な性的なものがからんでくる。尾道にその生活の

本拠を置いた謙作は、気分転換のため四国への小旅行を行なう(第二の四、五)。そして、屋島の宿でお栄との結婚を思い、尾道に帰って信行を介してその意を伝えてもらうが、自身の出生の秘密がもたらされるということを招来した。この〈空間〉移動にお栄が深く関わっていたのである。同じようなことは、後篇でも起こっているのだ。謙作は、その生活の本拠を京都に置いていたが、大陸で失敗して困窮しているお栄を迎えに、朝鮮までの小旅行に出かける(第四の二)。この〈空間〉移動、すなわち謙作の留守中に直子の過失(不義)が起こったのである。四国への小旅行と朝鮮までの小旅行、この二つの〈空間〉移動は、ともにお栄がからみ、謙作に衝撃的なことがもたらされるといって、〈類似〉性とある種の法則性すらを見出せるのである。

謙作の恋愛や結婚に対する姿勢は、前篇と後篇では、まさに〈対照〉をなしている。第一の三で、謙作は石本から「若し君にその気があれば僕は本気でいい人を探したいと思ふんだが……」と言われるが、あっさり断っている。愛子求婚失敗が尾を引き、他人を信用できなくなっているのだ。対女性に関していわば自力本願でいこうとしているのだが、登喜子やお加代に好意を持っても

そのイリュージョンは持続しない。お栄への求婚もその意志がふらついたままで敢行され、それは悪あがきに似たものに過ぎなかった。しかるに、第三の二では、「若い美しい女の人」(直子)を見初めたことを友人の高井に素直に話し、高井から、「頼むのさ、誰れか人にやつて貰ふのさ」と言われると、即座に、「うん」と答えている。そして、とりわけ石本の助力を得て直子との結婚話はトントン拍子に運んでいくのである。自分の消極性、非社交性を自覚できるようになったからこのような姿勢で臨めたのかもしれない。

愛子と直子は、〈類似〉する側面を持つ一方で、〈対照〉をなしていることに気づかなければならない。〈類似〉するのは、その家族構成である。愛子は彼女が十五六の時にその父を失い、母と兄の三人家族となった。一方の直子も、いつかは定かではないがその父を失っていて、母と兄の三人家族である。単なる偶然なのか、父を亡くしている女性に謙作は繰り返し求婚したことになるのである。が、その〈対照〉の方を重視せねばならない。そもそも謙作の愛子求婚は、愛子の母が謙作の母と幼馴染で親しかったことから、亡き母を慕う動機で思い立ったものと解される。そして、直接的には、愛子とその

父の葬式の際、白無垢を着て泣いている姿を見て、愛子を可憐に思ったことによる。ここには悲劇的な雰囲気がかかっているのだ。しかるに、直子は、「鳥毛立屏風の美人」というイメージが一方にあるものの、もう一方で「気持のいい喜劇に出て来る品のいい快活な娘」(第三の十二)というイメージが付加されていた。喜劇的な明るいムードのなかにいるのだ。また、愛子の父が水戸の漢方医であったとされ、その水戸出身の武田耕雲斎一味がその最期を過ごした地、すなわち敦賀が直子の出身地になっているのも、奇妙な〈空間〉の〈対照〉を形成している、因縁めいたものすら感じられるのである。

先に、悪女の栄花と蝮のお政が、その心に張りがあるかないかで〈対照〉的に描かれていることを述べた。これと同じようなことは、後篇にも見出せる。謙作は直子と結婚の式を挙げたあと、何日か経って、二人で「祝物の返し品の」を買に出かける(第三の十三)。「有名な陶工の家」を何軒か見るのだが、「宗六の家」と「木仙の家」(「宗六の家」の分家)が〈対照〉をなしていることに気づく。「宗六の家」が陰気でじめじめしているのに対し、「木仙の家」は生き生きして、「二代木仙」も「如何にも覇気のある人物」とされる。むろん謙作

は、「木仙の家」で「返し品の」を揃えたのだが、ここに悪女ならぬ職人の〈対照〉が見られ、それは前篇の反復ともなっているのである。

前篇と後篇の〈対照〉は、二ヶ所の蠧船のシーンにも見出せる。尾道における謙作は、おのれの出生の秘密を知ったあと、薄暗い倉庫町にある蠧船に行った(第二の七)。陰気臭い座敷のなかで、淫蕩な気持ちをもっとしきりに思うのだが、その孤独のさまは際立っていた。しかるに、第三の十三、先の「木仙の家」での買物のあと、謙作と直子は、菊水橋の袂から蠧船に行った。その周囲は「祇園の茶屋々々の灯り」や「四条のけばくしい橋」の「灯り」などで、まばゆいほどに明るかったのである。直子という絶好の伴侶を得、幸福感に浸っている謙作に、同じ蠧船という場にあってもそれにふさわしいものが提供されているのがつかめるのだ。

そして第三の十三はこのあと、かつて蝮のお政が芝居をしていた小屋の前を二人が通りかかるシーンとなる。ここで謙作は直子に蝮のお政や栄花のことを話す。前篇にあったあの印象深いエピソードは決して流し飛ばされてはいなかったのだ。このように『暗夜行路』は二重三重の〈対照〉を形成しながら展開していくのである。

最後に、『暗夜行路』に描かれた病い関連に注視してみたい。前篇第一では、謙作がそのいわば友達耽溺の疲れから風邪をひいて二日ほど床の中で過ごしたぐらいのものである(第一の七)。第二では、謙作は尾道で軽い中耳炎にかかり、この地を引き上げることとなった(第二の九)。後篇第三では、長男直謙が丹毒にかかり、直謙を失うこととなる(第三の十八、十九)。第四では、お栄が瘡の発作に苦しんだりしたことも示されている(第四の二)。謙作が大山で大腸カタルを患い、床に就いたままでこの物語が終わる(第四の二十)ということになっている。このうち、尾道での中耳炎と大山での大腸カタルは〈空間〉移動と連動して〈対照〉を形成し、直謙の丹毒をめぐる医者たちと謙作の大腸カタルをめぐる医者たちが〈類似〉かつ〈対照〉を形成していることを明らかにしたいと思う。

直謙の発病に際し、初めに診断したのは「薄い天神髭」を生やした「見すばらしい小男」の医者であった(第三の十八)。この医者の診断は「不得要領」で、一種の消化不良だろうとした。次いで、「K医師」が診断をする。「K医師」は、「半白の房々とした口髭を持った大柄な人」とされる。丹毒と診断し、なかなか困難な病気だとした。

天神髭の医者と「K医師」はその外見上まで〈対照〉をなしているのである。が、このあともう一人医者が登場してくる(第三の十九)。手術のあととは、「K医師」に代わり、「同じ病院の外科医」が、よく来るようになって、この外科医が直謙の最期を診取ったのである。

一方、謙作の病いを初めに診断したのは、「年寄った小さな医者」であった。急性の大腸加多兒(カタル)と診断した。次いで、「余り若くない代診」が来て、もしかしたらコレラではないかと心配した。いずれも頼りないところがあるのだ。そこで、三番目に、「米子の〇〇病院の院長さん」、すなわち「〇〇博士」に診てもらったことにする。むろん「〇〇博士」の登場はないのだが、「年寄った小さな医者」および「余り若くない代診」とは〈対照〉をなす人物だろうと予測がつくのである。

謙作の尾道での中耳炎と大山での大腸カタルは、その病状の軽重で〈対照〉をなしている。が、ここに謙作の〈空間〉移動をからめて、大山での謙作がそのまま死んでしまうのか生きのびるのかを推測してみたい。

前篇の謙作は、東京の赤坂福吉町から尾道に移転し、再び東京(赤坂福吉町)に戻り、大森に転居した。そして、やがて謙作が京都に移るであろうことは、京都好き

の友人宮本が謙作とお加代を「仲のええ事」と京都訛りを真似て冷やかした。」こと（第一の八）、なぜか時々京都訛りを真似るプロステイチュートの登場（第二の十四）などの〈類似〉系列で細心の伏線が張られていたことで納得がいく。後篇の謙作は、京都をその生活の本拠としてしばらくここに暮らす、やがて大山へと旅立ち、そこにしばし滞在する。謙作の大山行も、「何処か大きな山の麓」の村八分の百姓に変身するという想像を巡らしたこと（第二の十四）、謙作が伊勢に旅をして、同宿の鳥取県の人から山陰の「何とかいふ高い山が、叡山に次ぐ天台での霊場で、非常に大きなそして立派な景色の所だといふやうな話」を聞かされたこと（第三の八）などの〈類似〉系列の伏線の設置で予測できることだったのである。が、前篇で謙作が尾道から東京（赤坂福吉町）に戻り、大森に転居したように、『暗夜行路』の〈空間〉移動の法則からいって、後篇の謙作は大山でその生涯を終えてはならないのだ。前篇の反復として、謙作は大山に長くとどまっていけない、とその〈空間〉移動の法則が示唆するのである。

『暗夜行路』の前篇に「序詞」があったように、後篇にもいわば別棟のエピローグが本来は設けられるべきだっ

たと思う。しかし、それは読み手がある程度予測できるものだったので、作者志賀は敢えて書かなかったのかもしれない。謙作は、その後「〇〇博士」の診察を受けてその病いに打ち克ち、快方するに違いない。そうであってこそ直謙の場合との〈対照〉が形成できるのだ。そして謙作は『暗夜行路』の〈空間〉移動の法則に従い、直子といったん京都（衣笠村）に帰ることになる。さらに次なる転居は、同じ関西の古都である奈良が有力な候補地として想定される。奈良に住む高井は謙作に奈良に来ることを勧めていた（第三の二）。謙作が日帰りで奈良法隆寺に旅をした折、隆子の誕生があった（第四の八）。このように伏線はすでに周到に張られているのである。

『暗夜行路』の作品構造を子細にみると、いかに手の込んだ細工が随所でなされているかがよく分かる。明らかに意図的なものもあれば、この作者特有のいわば無意識の美学が働いて成ったものもあるに相違ない。すでに作品は作者から離れ、一人歩きをしている。⁽³⁾『暗夜行路』は、近代の長篇小説として、類まれな構造を持つ、譬えて言えば随所にモザイクを張り巡らしたような、極めて美しい大きな建造物として、われわれの前に存在しているのである。

《注》

- (1) 拙稿「時任謙作の人間像をめぐる考察——『暗夜行路』の展開に即して——」(『文芸研究』第八十六号、二〇〇一・八)
- (2) 運實重彦「廃棄される偶数 志賀直哉『暗夜行路』を読む」(『國文學』、學燈社、一九七六・三)。のち「私小説」を読む(増補新装版)(中央公論社、一九八五・一一)に収録。この運實論文から、私流に捉え直した一例を挙げるなら、西緑の二階に持ち込まれた煙草の「サモア」と「アルマ」は〈類似〉するもので、やがてそれは謙作による芸者登喜子と小稲の比較、〈対照〉に発展する機能を担っていた(第一の四)、というふうに読み取ることができるのである。
- (3) 拙稿『暗夜行路』における原風景とその関連テーマ——「序詞」の形成とその遠心力——(『文芸研究』第八十五号、二〇〇一・二)
- (4) 阿川弘之『志賀直哉 下』(岩波書店、一九九四・七)
- (5) 高橋英夫「さすらいびと時任謙作」(『志賀直哉 見ることの神話学』所収、小沢書店、一九九五・五)
- (6) 加賀乙彦『日本の長編小説』(筑摩書房、一九七六・一一、のち、ちくま学芸文庫『日本の10大小説』(一九九六・七)として刊行。)
- (7) 平野謙『暗夜行路』論(『群像』、一九六八・三、四六。のち、『わが戦後文学史』に所収、講談社、一九六九・七)
- (8) 須藤松雄『志賀直哉の文学』(増訂版)(桜楓社、一九

七六・六

- (9) 志賀直哉は、「現代日本文学全集・志賀直哉集」序(一九二八・七)で、「夢殿の救世観音を見てみると、その作者といふやうなものは全く浮んで来ない。それは作者といふものからそれが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは格別な事である。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあつたら、私は勿論それ自分の名などを冠せようとは思はないだらう。」としてゐる。『暗夜行路』こそ、今やまさしく作者志賀から遊離して、一人歩きをし出した格別な文芸作品であると思ふのである。